

広島市における胃がんの記述疫学

小山 幸次郎*

広島市腫瘍登録では、1957年の登録業務開始から1995年末までの39年間に、胃がん症例19,893件を登録した(男性12,700件、女性7,193件)。年度毎の登録数は年々増加し、1995年には男性で600件以上、女性で300件以上に達した。世界人口を用いた1年単位の年齢調整罹患率は、1977年までは緩やかな減少傾向にあったが、その後は緩やかな増加・減少を繰り返し、近年では増加の周期内にあり、1990年代の罹患率は人口10万人あたり80-90を推移している。一方、女性の罹患率は1950年代後半の人口10万人あたり50台から1995年の31まで、緩やかではあるが一貫した減少傾向を示している。広島市衛生統計から引用した胃がん死亡率は、男女ともに急激な低下傾向を示している。特に男性で罹患率との乖離が大きいことが示された。年齢別罹患率は、男女ともに60歳台から増加傾向が顕著となり、以降年齢とともにさらに増加した。

組織分類は腺がんが大部分を占めるが、Neoplasm, Malignant(morphology code 8000/3)、Carcinoma, NOS(8010/3) および平滑筋肉腫

などの腺がん以外の組織型を示すものが男女とも累計で約20%にみられた。しかし、前2者の割合は登録初期にその割合が高く(1950年代後半から1960年代にかけては50%以上を占めていた)、最近では2%前後を推移している。また、嚢胞性あるいはムチン産生腫瘍はどの時期においても1-2%であるのに対し、印環細胞がん1970年代後半から増加傾向にあり、最近では6-8%の割合であった。

がんの診断確度も登録初期には画像診断や臨床診断の割合が高く(それぞれ6-7%)、顕微鏡的に診断されたかどうか不明であったケースも多くみられ(15-25%前後)、逆に顕微鏡的に診断された割合は45-60%にとどまっていたが、近年では97%の高率を示している(累計では84%)。

全期間を通じての進展度は、26%が早期がん、44%が進行がん、30%が不明であったが、時間的推移をみると早期がんの割合が増加、進行がんは横ばい、進行度不明は減少傾向にある。直近の3年間ではそれぞれ46%、43%、11%であった。

*放射線影響研究所 疫学部

〒732-0815 広島市南区比治山公園 5-2
